クラウドファンディングにかかわる事務作業について

公益財団法人帆船日本丸記念財団　島宗美知子・蓬田　奈央

1　はじめに

公益財団法人帆船日本丸記念財団では、令和4年9月から11月にかけて、クラウドファンディングに初めて挑戦した。第1目標金額300万円でスタートしたが、最終的に1250万1千円という大きなご寄附を得ることができた（表1）。

執筆者2名は、準備の段階から本稿執筆時（令和5年10月）に至るまで様々な事務を担当した。今回クラウドファンディングにかかわる事務について振り返り、今後クラウドファンディングへの挑戦を検討されている方々の参考にしていただきたく、本稿を執筆する次第である。

なお、当帆船日本丸記念財団（以下財団と記す）は、横浜市西区にある帆船日本丸と横浜みなと博物館他を管理運営する横浜市の指定管理者である。

集中的にクラウドファンディングの活動を行ったのは、事前の準備を本格的にスタートした令和4年7月から、一部を除く返礼品及び寄附金受領証明書を発送した令和5年1月までの7か月間である。

表1　当財団でのクラウドファンディングの概要

タイトル	帆船日本丸の航跡を末永く未来へ　船体維持修繕＆無線日誌修復プロジェクト	
寄附募集期間	令和4年9月28日（水）～11月18日（金）　52日間	
寄附件数	509件（※）	
クラウドファンディング運営会社	READY　FOR株式会社	
方式	ALL　or　NOTHING方式（※募集期間中に、支援された総額が目標金額を超えた場合に、プロジェクト成立となり資金を受け取ることができる方式）	
第１目標金額	300万円	
ご寄附の使い道（第1目標）	船体維持修繕、損傷の激しい無線日誌1冊の修復と公開のためのデジタル化、無線日誌保存用の箱100箱の作成	
経過（寄附募集作業終了まで）	9月21日（水）	記者発表（主管課である横浜市港湾局賑わい振興課と財団の連名で実施）
	9月28日（水）	10時寄附募集開始
	10月 3日（月）	第1目標達成　第2目標金額を750万円に設定
	10月26日（水）	第2目標達成　第3目標金額を1000万円に設定
	11月15日（火）	第3目標達成　第4目標金額を1100万円に設定
	11月17日（木）	第4目標達成
	11月18日（金）	23時　寄附募集終了（財団へ直接持参の場合は11月25日（金）まで受け付け）
	11月30日（水）	記者発表（横浜市と財団連名）
ご寄附金額（最終）	1250万1千円（※）	
ご寄附の使い道（最終）	船体維持修繕（木製ヤード交換工事の一部）、無線日誌修復とデジタル化4冊、無線日誌保存用の箱146箱の作成他	

※財団へ直接申し込み・入金の人数・金額を含む。プロジェクトのWEBサイトの表示とは異なる。

2　寄附募集開始前の事務

今回の作業の主体は、公益財団法人帆船日本丸記念財団が担った。財団全体で協力して作業を進めたことはいうまでもないが、事務作業は主に3名で行った。情報共有できて動きやすい人数だったと感じている。構成は財団理事長（当時）、学芸課職員1名、総務課職員1名。さらに財団の所管課である横浜市港湾局賑わい振興課とも協力して作業を進めた。

最初に実施したのは、運営会社の選択である。実施の1年前、令和3年9月にREADYFOR株式会社とオンラインミーティングを実施した。READYFOR株式会社には文化部門があり、文化財支援に力を入れているという話を伺った。すでに博物館、公益財団法人が利用していることも確認した。

懸念点として、新聞社が運営するサイトと比較した場合、当財団のウィークポイントである広報のサポートがないため、全て自分たちで行うイメージがあった（ただし新聞社のサイトで行う場合も記事が確約されるわけではない）。その後も他社との比較検討を続けた結果、READYFOR株式会社が文化芸術部門での実施経験が豊富であり、かつ令和3年8月には当財団と類似の施設である大和ミュージアム(広島県呉市)のクラウドファンディングを達成していることも決め手の一つとなり、同社と契約をすることとなった。

運営会社が決まると、7月から横浜市を含め3者での打ち合わせが始まった。筆者の記録では最初の打ち合わせは7月15日である。当初2週に1度、スタート1か月前(8月下旬)からは1週間に1度の頻度で行った。運営会社の担当者1～2名、財団3名、横浜市から2～3名が参加した。初めての実施のため不明な点が多く、週に1度の打ち合わせはとても助かった。なお、運営会社との打ち合わせはすべてオンラインで実施した。

開始前の準備として

2―1　クラウドファンディング対象事業の決定
2―2　募集期間の設定
2―3　プロジェクト本文の作成
2―4　リターン（返礼品）の検討
2―5　発信先リストの作成
2―6　チラシの作成・印刷・配布
2―7　応援メッセージの依頼

図1　修復対象の帆船日本丸無線日誌。チラシにも掲載した画像

2―8　記者発表の実施

などを行った。

以下に開始前事務の内容を記す。

2―1　対象事業の決定

クラウドファンディングの対象として、帆船日本丸無線日誌、客船ポスター、そして絵画作品の修復の3点を候補として挙げた。これらの資料について修復業者に見積もりをとり、候補資料と金額をみながら横浜市及び運営会社と協議した。帆船日本丸という知名度の高さや修復の緊急性などから、今回は帆船日本丸の無線日誌の修復及び船体維持修繕を目的にクラウドファンディングを実施することとなった（図1）。

2―2　募集期間の設定

令和4年9月15日が帆船日本丸重要文化財指定5周年という節目にあり、開始日をこの近辺とし、準備期間を考慮して9月28日（水）スタートとした。準備には3、4週間以上はかかること、さらに余裕をもって準備した方がいいという運営会社のアドバイスもあった。何日間で目標金額まで寄附金が集まるか不明であったため、寄附募集の最大期間（当時）の52日間実施することとした。

2―3　プロジェクト本文の作成

ＷＥＢに掲載するプロジェクト本文は運営会社と相談して作成した。運営会社のWEBサイトに開設された本プロジェクトのページに次々と文章を入力し、画像を組み込んでいった。最終的には、1万字を超える字数を入力した。このあと運営会社で読みやすくデザインを修正してもらった。画像が多めの方がよいようである。

2―4　リターン（返礼品）の検討

運営会社の担当者からは「リターンにはそこまで力を入れなくて大丈夫」と言われていたが、ク

ラウドファンディングはリターン目当てにする寄附、というイメージがあったので、帆船日本丸と横浜みなと博物館の招待券のほかオリジナルグッズや版画、日本丸の写真なども用意した。本プロジェクトスタート時には内容が決定、画像を準備した。リターンのイメージがわきやすいように、プロジェクトページに画像を掲載した。

始まってみると高額になるほど「返礼品なし」コースが人気であった。ただし期間中にリターン品を紹介した新着情報（現「活動報告」。内容は後述）はよく見られていた（新着情報20回中のアクセスランキング4位）。

費用がかからないリターンとして、「プロジェクト報告書にご芳名掲載」、「財団WEBにご芳名掲載」も用意した。こちらは名前を「本名のみ」「登録している名前のみ」と限定しなかったため、ペンネームも多かった。寄附者の2/3の方がご芳名掲載を希望された。

2―5　発信先リストの作成

プロジェクト公開後の広報施策を計画するにあたって、現状を整理するため、利用可能なSNS、WEBサイト、またクラウドファンディングの情報拡散を依頼できる団体やその方法をリスト化した。これを基礎データにして、チラシの配布や告知協力依頼を行った。

2―6　チラシの作成・印刷・配布

チラシのデザイン作成は運営会社に依頼した。チラシはA4判両面カラーとした。デザイン費は先払いである。帆船日本丸の写真を大きく使い好評だった。表面にはプロジェクトの概要、裏面には寄附方法や申込書、リターンの紹介を掲載した（図2、図3）。当財団に直接寄附金をお持ちいただく方が多かったため、チラシはその際の申込用紙としても使用した。

印刷はネット印刷を利用した。最初は1500枚、増刷1回目2000枚、2回目1500枚、合計5000枚印刷した。配布先は、横浜市18区役所、図書館、帆船日本丸関連の団体、市内または首都圏博物館などを中心に配架を依頼。残部は帆船日本丸で開催する総帆展帆をはじめとするイベントに来場される方々に配布した。

2―7　応援メッセージの依頼

応援メッセージは注目度が高まるものとして運営会社より掲載を推奨された。今回は、博物館と日本丸関係者の計2名にメッセージを寄せていただいた。文字数は300字程度、顔写真1点を掲載し

図2　チラシ表

図3　チラシ裏

た。筆者の記録では、9月上旬に原稿を依頼し、寄附募集開始直前(9月末)にプロジェクトページ掲載を運営会社に依頼した。作業期間が短く原稿依頼先には申し訳なかったと反省している。時間の余裕を見てお願いした方がよい。

2―8　記者発表の実施

記者発表は財団主管課である横浜市港湾局賑わい振興課と共同で開始1週間前、9月21日（水）に実施した。横浜市との共同発表ということもあり、報道機関の注目を集め、発表後に新聞・雑誌社の取材そして記事掲載が相次いだ。結果的に地元紙だけでなく全国紙の主に地方版に掲載していただけた。中には帆船日本丸の総帆展帆のカラー写真を大きく掲載してくださる新聞もあり、「日本丸の写真が掲載されていたので、記事を読んで募金した」とおっしゃる寄附者もいた。新聞、雑誌、ラジオなど、掲載放送件数はおよそ20件。本クラウドファンディングについて2回掲載してくださる新聞社も複数あった。

運営会社の「情報公開は始まってからでよい」というアドバイスどおり、記事になった日の朝から電話での問い合わせが多かったため、記者発表の日は寄附募集開始日以降に設定するべきであった。記事になっているのにクラウドファンディングページが公開されていないのは誤った誘導にも繋がり、もったいなかった。

7月15日から打ち合わせをはじめて、事務作業に追われつつ、あっという間に2か月余りが経過した。この間、新型コロナウイルスに感染したスタッフもおり、作業は順調とは言えなかったと思う。定期的な打ち合わせで提示される作業をひとつひとつ進め、いよいよ寄附募集開始の日を迎えた。

3　寄附募集期間中の事務

9月28日（水）10時より、52日間の寄附募集を開始した。

募集期間中の主な事務作業としては、以下があげられる。（　）は作業実施回数または頻度である。

3―1　寄附者からの応援コメントへの返信（ほぼ毎日）
3―2　WEB上の新着情報の更新（20回）
3―3　目標金額の再設定事務（3回）
3―4　インターネットでの申し込み以外の方への対応（ほぼ毎日）
3―5　運営会社との定期的なミーティング（期間中7回）と広報

図4　寄附者からの応援コメント（抜粋）

以下に寄附募集期間中の事務内容を記す。

3―1　寄附者からの応援コメントへの返信

今回のクラウドファンディングでは、寄附者から応援コメントを寄せていただいた。有難いことに開始当初は1日に20件、30件のご寄附と応援コメントが寄せられた（図4）。日本丸への熱い思いや激励、また思い出などがつづられ、毎日読むのが楽しみだった。この応援コメントに返信を送る。1日30件もあると、返信に丸1日かかる。時間を費やす悩ましい仕事ではあったが、この応援コメントが52日間プロジェクトを継続する大きな力にもなった。

3―2　WEB上の新着情報の更新

プロジェクトページに「新着情報」というコーナーがある（現在は「活動報告」に名称変更）。ここに、期間中20回、3日に1度程度のペースで情報を掲載した（図5）。内容は、帆船日本丸の総帆展帆や船内の紹介、修復する無線日誌や返礼品の紹介など。できるだけ帆船日本丸や寄附募集について新鮮な情報を閲覧者に提供するよう努めた。時には、横浜市内団体の親善大使やキャラクターに登場してもらい、プロジェクトページを多様な閲

図5　新着情報

覧者に見ていただけるように心がけた。

期間の中盤、「今いくら集まっているか」という電話での問い合わせがあった。様子見の方に動いてもらうため、新着情報のこまめな更新が必要と感じた。区切りのいい数字に達する瞬間に寄附をしたい人もいるかも知れないので、そうした話題（例えば「もうすぐ寄附者100人目！」）など、寄附の状況をみながらの丁寧な掲載も必要だった。他団体のクラウドファンディングを見ていると、人員に余裕のある団体や広報活動に慣れている団体は、期間終了前のカウントダウンなどをこまめに更新して盛り上げている。

3―3　目標金額の再設定事務

募集期間中、3回の目標金額の再設定を行った。目標金額に達してしまうと、寄附の勢いが弱まる可能性がある。このため毎日推移を見て、達成しそうな日にちを想定して準備を進めた。次の目標金額を横浜市と協議し、並行してWEB掲載原稿の作成を進め、財団内部決裁を経て、運営会社にWEBへの掲載を依頼した。第3目標達成日は、期間終了まで残り3日という日ではあったが、運営会社の勧めもあり、第4目標を設定。これを2日で達成した。

3―4　インターネットでの申し込み以外の方への対応

新聞記事を読んで電話で問い合わせてこられる方や当財団に直接現金を持って来られる方は開始直後から多かった。

電話での寄附の問い合わせに対しては、ご住所を伺ってチラシを郵送し、チラシにある口座番号に寄附金を振り込んでいただいた。チラシの申込書欄に寄附者の情報を記入して返送いただき、振込名と照会することで本人確認を行った。郵送のためタイムラグが発生するのと発送準備に手間がかかったが、この方法での寄附は寄附額の1/4にのぼった。

チラシに寄附金用の口座番号を記載したため、入金のみ行って申込用紙が届かず、連絡が取れなかった方が数名おられた。

財団の口座に直接入金された寄附金は、ある程度まとめて運営会社の当プロジェクトの口座へ財団から入金した（代理支援という）。入金するとプロジェクトページ上の金額バーが伸びて閲覧者の注目度が高まり、寄附行動へつながるものと期待した。

3―5　運営会社との定期的なミーティングと広報

期間中、運営会社、横浜市そして財団の3者で7回オンラインミーティングを行った。運営会社からは、直近1週間程度の分析データが提示され、これに基づいたアクションへのアドバイスがあった。

寄附は募集当初と最終日付近に多く寄せられ、中盤は寄附金額が伸びないと、運営会社から事前に話があった。今回も10月中旬から11月上旬までは寄附金額の伸びがゆるやかだった。この時期は、寄附募集をより広く周知するため、SNSでの情報発信、チラシの配布、新着情報掲載などを継続的に行うことやイベントの開催などが運営会社から提案された。

広報は、開始前の記者発表以後も各新聞や雑誌等の取材が継続した。市内のほとんどの新聞社が取材のために訪問してくださり、ありがたかった。何のために寄附が必要であるのかを、記者のみなさんに直接説明ができたのはよかったと思う。

SNSへの情報掲載は、海事関係や博物館関係など、当財団に関係する複数の団体の協力を得ることができ、情報拡散の大きな力となった。

募集期間は、気候もよく帆船日本丸のすべての帆を広げる総帆展帆をご覧になるお客様が多数来場された。チラシに帆船日本丸が帆を広げているカラー写真を使ったこともあり、来場されたお客

様の多くがチラシを手に取り、持ち帰ってくれたのはうれしかった。写真の選択も広報活動にとって重要であることを再認識した。

4　寄附募集終了後の事務

令和4年11月18日23時に、運営会社のWEBからの寄附の受付が終了した。今回のクラウドファンディングには、財団に直接寄附を持ってこられる方も多かったので、翌週の11月25日までは財団への入金受付を継続した。

11月20日付けで運営会社のWEBに終了報告を掲載し、11月30日に横浜市と財団の連名による終了報告の記者発表を行った。

令和5年1月には、寄付金受領証明書と一部を除く返礼品を送付。ここでクラウドファンディングの大きな事務は終了した。

終了後の主な事務として、

4―1　リターン（返礼品）の制作・準備等

4―2　リターン（返礼品）及び寄付金受領証明書の発送

以下に終了後の事務の内容を記す。

4―1　リターン（返礼品）の制作・準備等

開始前にリターンの内容を決定していた。新たに制作するものは数の制限をせずに大体の見積もりを取っておき、寄附募集終了後に正式発注したが、先に製作数を決めておいて、その人数分の返礼枠を設定する方法もある。リターンの種類が多かったため、すべてのリターンを用意するのに1か月程度かかった。

図6　返礼品　オリジナルモバイルクリーナー。大きさは縦18×横15㎝

4―2　リターン（返礼品）及び寄附金受領証明書の発送

オリジナルグッズはモバイルクリーナーを制作した（図6）。かさばらず寄附金受領証明書や招待券と同封することができた。運営会社からの寄附入金は1月上旬。入金後、確定申告が始まる時期なので寄附金受領証明書の送付作業を速やかに行った。発送用に窓付き封筒をクラウドファンディング用に新規で製作した（図7）。受領証明書と封筒記載の氏名とのとり違えがないようにするためである。そのほかの返礼品（額装した版画や写真等）は梱包し、別途宅配便で発送した。立体物の発送は金額が大きくなるので、送料を積算して事務経費に含めておく必要がある。

5　クラウドファンディングを振り返って

今回のクラウドファンディングでの反省点とし

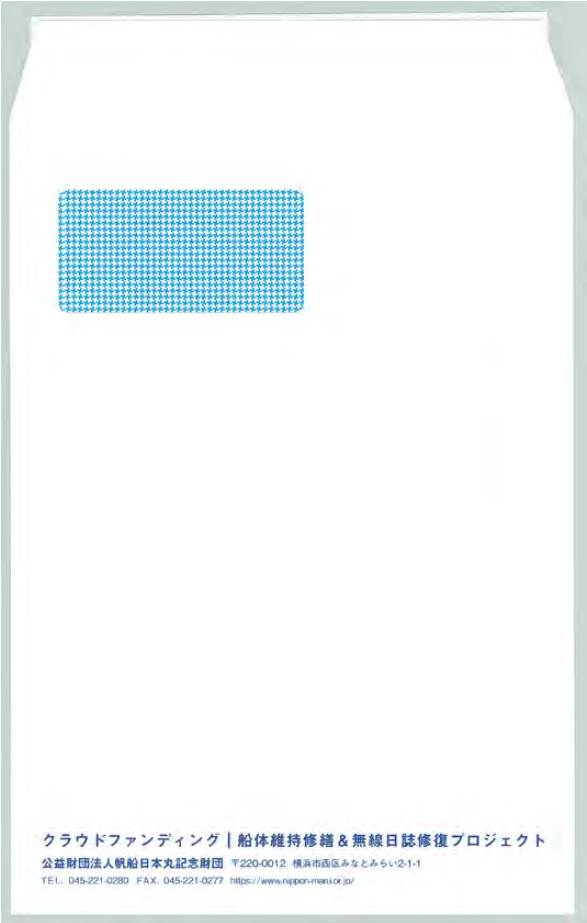

図7　窓付き封筒

ては、通常業務の合間の作業となり、事務担当としては負担が大きかった。準備からリターン送付まで日々の事務作業量は多い。寄附募集が始まると、直接財団事務室を訪れて質問や寄附をされるお客様もおられた。クラウドファンディングにかかわる対応は多様であり時間のかかることが多かった。

当財団にはもともと寄附用の口座があったのでその口座を入金口座としたが、クラウドファンディング用の口座を作っておいた方が、在来寄附と区別ができて管理しやすい。

また、今回の寄附者は横浜市内中心だったので、今後は全国の帆船日本丸ファンにどうやって情報を届け、幅広くご支援を募るかが課題。SNSをより活用した情報発信、運営会社のWEBの一層の活用、他都市での広報イベント実施などが有効な手段と思われる。なおSNSを利用した発信は、文字での情報拡散スピードが速いのでX（旧Twitter）が向いていると思った。

6　終わりに

クラウドファンディングの寄附で、帆船日本丸の船体維持修繕、及び無線日誌の修復作業を進めている。当初の目標金額よりも多くの寄附をいただき、事業を拡大できたことから、最終的に事業が完了するのは令和7年1月の見込である。

令和5年1月の寄付金受領証明書発送後のクラウドファンディングに関わる事務として、支援者へ報告書の送付、また活動報告のWEB掲載を行った。報告書は今後も事業終了ごとにお送りする予定である。プロジェクトページの活動報告は運営会社から今後も利用可能と言われているので、帆船日本丸の近況や寄附による活動の経過報告などに使わせてもらっている。掲載すると寄附者へ通知される。帆船日本丸に強い関心をお持ちの方々に継続して情報を提供し、これからも帆船日本丸の応援団であり続けてほしいと願っている。

今回のクラウドファンディングで、寄附者から寄せられる応援コメントにはとても感激した。こんなにも帆船日本丸へ思いを寄せてくださっている方が多いこと、私たちの活動を見てくださっている方がたくさんおられることが、とてもうれしかった。ご寄附はもちろんありがたいが、この応援コメントから得られる喜びも大きかった。

令和5年8月には、国立科学博物館でクラウドファンディングが実施され、大きな反響があった。今後も文化施設等での寄附募集やクラウドファンディングの利用は増えてくるものと思われる。クラウドファンディング実施を検討されているみなさまに、本稿が何らかの参考になれば幸いです。